

# 俳壇 読売

## 矢島 渚男 選

光太郎智恵子の浜や目刺干す

君津市 榎本 静江

【評】『智恵子抄』の舞台は九十九里浜。しかし晩年の彼女は精神を病み、看病に疲れ喪心の彼は戦争賛美へと走り晩年の反省が用意される。大学時代の夏休みに彼が過酷な生活を送った山小屋に行った。死後一年ほどの囲炉裏の周りには彼の息遣いが漂っているようだった。

川崎市 西 順子

【評】清冽な水流と山の桜の美しさを単純に捉えている。思いきや土竜の指の桜色

松江市 三方 元

【評】古来モグラは日光に触れると死ぬと言われるが、手指が桜色のピンクだった驚き。

麻校の花を見に行く杖を手に

西東京市 永井 康信

不発弾ひとと思つて昭和の日

高槻市 村松 譲

春愁のこの道の先能登の町

大月市 江刈内陽子

「頑張り」はパワハラですか昭和の日

神戸市 吉野 勝子

春雷にと突かれ正す我が身かな

さいたま市 秋葉 武彦

西行の杖と伝はる桜かな

東金市 佐瀬 忠義

定年やまたの濁世の春眠し

神戸市 桐本 博昭

## 高野ムツオ 選

そよよと磯巾着に波の風

宮崎市 長友 聖次

【評】「そよよ」は風が吹くさまだが、本来は物が触れ合う微かな音を意味した。それを踏まえると磯巾着を揺らす波音まで聞こえて来そう。海中を吹きわたる春風だ。父の庭父の庭石さくら散る

川崎市 井手真知子

【評】父がこよなく愛した庭。かつて桜の時期には、そこにたえず父の姿が必ずあった。「父の」の繰り返しの恩愛の情がこもる。花冷えと足腰に言い聞かせをり

埼玉県 小原原君江

【評】この辛さは陽気が戻れば必ず治る。そう自分に言い聞かせる。しかし、それほど深刻に感じないのは「花冷え」に華やきが潜むせい。ひっそりと捲かれをりけり花筵

東京都 杉中 元敏

緑風が怒濤のごとく大地被ふ

那珂市 宮沢 史子

引越しの車また来る花の屋

稲城市 山口 佳紀

鉛筆のすつかり丸し花ゆすら

飯沼市 中田 幸子

鯉の口ばかりと開く糸桜

土浦市 細井 五男

過疎なれど長寿の村や桃の花

南足柄市 柏木 幸子

花守に聞こえて来るか花の声

広島県 三宅千恵美

## 正木ゆう子 選

金鏑を削るがごとく雉の声

東京都 望月 清彦

【評】「ケンケン」のオノマトペでよく表現されるが、朝毎耳にする雉の声はそう聞えず、どこか錆びた金管楽器のよう。金鏑を削ったことにはないけれど、なるほどの比喩。ぶらんこの後ろへさがるときも漕ぐ

大阪市 今井 文雄

【評】ぶらんこの漕ぎ方を体得したときの感覚を今も覚えている。確かにこの句のようだったかもしれない。前へ後ろへ。しだいに高く。春愁や宇宙がもしも無だったら

寒河江市 大谷 正行

【評】無だったら、愁いは無くなるという意味に解釈したが、どうだろう。そもそも無とは何？などと、新しい悩みが生まれそうであるが。米高し今年多目の種浸す

四街道市 須崎 輝男

停戦の話静かに黄砂来る

東京都 本多 明子

花散つて小寶玉咲きしこと知れり

大阪府 池田 寿夫

桑咲くと毛蚕三頭来たりけり

津市 中山 道春

つちふるや皆渡来せし者の裔

神奈川県 中島やさか

シラシラと指に遊べる馬酔木かな

東京都 松永 京子

都井岬馬の食べない翁草

日南市 宮田 隆雄

## 小澤 實 選

焼かれつつ南無南無と栄螺かな

川崎市 益子さとし

【評】栄螺の霊焼きである。栄螺の貝殻を鍋に見立て、そのまま火にかけているのだ。その時の音を「南無南無南無」と聞き取ったのが秀逸。実は残酷な料理だ。競ひて浅蜷口開くなり酒振れば

北本市 萩原 行博

【評】こちらは浅蜷の酒蒸しである。一見、酒を喜んで口を開けているように見えるが、熱に耐えかね口を開いているわけなのである。巢燕を仰ぎくぐるや縄暖簾

名古屋市 可知 豊親

【評】居酒屋の玄関先に燕が巣をかけ、子が孵っている。燕をだいたいしている居酒屋。まず燕を話題にしつつ、注文するのである。花冷えや家庭料理の立ち飲み屋

所沢市 佐々木孝逸

砂浜にシャドーボクサー寺山忌

栃木県 あらあひとし

春宵のフランス料理箸も置き

宝塚市 広田 祝世

大将の高下駄四寸めはる煮る

多摩市 宮田 剛

開いた口みんな受け口燕の巢

芦屋市 田中 俊

褒められて節飯をまた炊けり

白井市 昆舎利愛子

タッパーのがんと煮返す花の冷え

名古屋山内 三雅

## 俳句の道草 ①

津川絵理子（俳人）

## 俳句あれこれ

今日は立夏。「リッパ」という音には、春と決別する潔い響きがある。実際は、春と夏が混じり合いながら季節が移ろうのだけれど。

たてよこに富士伸びてゐる夏野かな 桂信子

夏になると思いつく句。開放的で大らかな気分が漂う。信子はこのほか、今頃の季節を好んだようだ。『晩春』『新緑』『初夏』『緑夜』と名付けた句集もある。そのあとは『草樹』『樹影』『花影』『草影』と続く。私は信子の俳句が好きで、句集名にも着かれる。夏の扉を開いて、緑豊かな美しい庭へ誘われるイメージが湧くからだ。

もっとも『初夏』のあとがきに「新緑の激しさを私の句の力としたい」とあるから、信子はこの季節に、自然のデモニーニッシュな生命力を見ていた。一方私はどちらかというと、懐かしさを感じる。どこまで行っても迎り着けない故郷のような、懐かしい季節なのだ。



題字デザイン・イラスト

福田美蘭